

楽しさと厳しさと

南山大学経営学部経営学科 中尾陽子

坂中先生のイメージは？ と問われたら、私の中には『楽しい』と『厳しい』の2つの言葉が浮かんできます。先生とは所属する学部・学科が違い、授業や講座をご一緒する機会にも恵まれなかったため、関わりの機会は決して多いものではありませんでした。それでも、私の中には坂中先生のイメージが確かにあることに、とても不思議な感じがしています。今回、このイメージはどこから生まれたのだろうか？と思いを巡らせてみました。

まず、『楽しい』については、日本体験学習研究会の運営をご一緒させていただいた体験が大きいと気づきました。運営委員のミーティングで話が煮詰まると、坂中先生は、「僕はラボラトリー（方式の体験学習）の人ではないので、よくわかりませんが…、」と前置きをしながら、誰もが思いついていなかった楽しい意見をぼーんと投げかけてくださったことを思い出します。その意見の楽しさはもちろんなのですが、極めて楽し気に語られる坂中先生のご様子がとても印象に残っています。また、懇親会ではいつも司会をお引き受けくださり、それはそれは楽しい進行で盛りあげてくださいました。決して、一生懸命楽しませようというような振る舞いではなく、ありのままに、無邪気に、とても人懐っこくその場を楽しむ姿がただただ面白くて、周りではどんどん魅せられていったのではないかと感じます。

それとは随分異なるイメージである『厳しい』は、この人間関係研究センターの活動、特にミーティングの場面を通じて、度々感じてきました。坂中先生のご発言は、私にとって、「このセンターはどのような場なのか？」「このセンターのミッションは、我々センター員の関係の中で実現できているのか？」と問いかけているように感じ、いつも身の引き締まる思いでした。この場でも先生は、「私はPCAの人で、ラボラトリーの人ではない。どうもこのセンターは、ラボラトリーが中心にある、という感じがするので、なんとなく生きづらい。そうではなくると、ラボラトリー以外の私みたいな人も、もうちょっと生きやすくなるんだけどなあ。」というような発言を通して、明確にご自身の思いを伝えてくださいました。

坂中先生のものすごさは、このような一見批判的な発言をされる際にも、必ず共にいようとしてくださる姿勢が明確に伝わってきたところだと感じています。その上で、ご自身の大切にしている思い・立ち位置をはっきりと示してくださるので、私はいつも、「坂中先生と共にお仕事をしていくには、どのような可能性があるかな？」と、前向きに考える体験をしていました。大袈裟な、と思われるかもしれませんが、私にとって坂中先生を交えたミーティングは、ダイバーシティ&インクルージョンをリアルに実感・実践する場になっていたこと、間違いありません。

坂中先生には、まだまだ教えていただきたいことが沢山ありましたが、これからも一緒にお仕事させていただけると信じていました。しかし、こんなに早くお別れすることとなり、残念でなりません。心より、ご冥福をお祈り申し上げます。これまで本当にありがとうございました。